

【書評】

百余冊では語り尽くせぬ半自伝的書評集

—塚本恭章『経済学の冒険 ブックレビュー&ガイド100』（読書人、2023年）を評する—

A Semi-Autobiographical Collection of Book Reviews Requiring more than 100 Books:
A Review of TSUKAMOTO Yasuaki's *Keizaigaku no Bouken: Book Review & Guide 100*
(*The Adventure of Economics*), Dokushojin, 2023

山 本 英 司
YAMAMOTO Eiji

目 次

- I. はじめに
- II. 本書の構成
- III. 本書の評価
- IV. まとめに代えて

I. はじめに

まず、利益相反の可能性について明示しておく、本書評は、著者である塚本恭章氏（以下「著者」、また本書評の執筆者である山本は「評者」と称し、本書評全体を通して敬称は省略）の依頼に基づき、著者からの献本を受けて執筆されたものである。

本書は、一言で言えば書評集であるが、ノンブル付きのページだけでも651頁を数え、単なる書評集を超えた複雑な構成を持つ。著者紹介から略歴部分を引用すると、「1974年生まれ。1992年岐阜高等学校卒業、1996年慶應義塾大学商学部卒、2008年東京大学大学院経済学研究科修了（経済学博士）。学位論文は「社会主義経済計算論争の史的展開——競合的学派の諸相」。日本学術振興会特別研究員PD（國學院大學）を経て、2011年から愛知大学経済学部専任教員（経済学史、社会思想史）。社会経済学専攻。高崎経済大学、滋賀大学非常勤講師を歴任」とある。数多くの共著書や論文を有するが、本書が初の単著とのことである。

上記でも述べたように、本書は複雑な構成を持つ。そこで、第Ⅱ節ではいささか詳しく本書の構成について述べる。第Ⅲ節では本書のプロローグにおいて明記された5つの工夫点に沿って本書の評価を試みる。最後にまとめに代えて若干の感想を述べる。

II. 本書の構成

第Ⅰ節でも述べたように、本書は複雑な構成を持つ。以下、いささか詳しく紹介していこう。

まず、大きな枠組みを紹介する。本書には、「プロローグ」と「エピローグ」の間に5つの章と「補章」「特別編」があり、これらが言わば本体を構成する。「エピローグ」の後に言わば付属資料として、「年表」「人物ガイド（第1章～第4章の註）」「人物ガイド作成文献一覧」「初出一覧」「書名索引」「著者名索引」、そして目次には明記されておらず標題も無いが著者紹介がある。5つの章と「補章」には、それぞれの本文に加えて、冒頭文と「間奏曲」、さらに「『経済学の冒険』へのリアクション」として2名ずつの寄稿文が、それぞれ付けられている。第4章までに収録されたレビューには、それぞれ「関連レビュー」として第5章までに収録されたレビュー&ガイドから数点ずつ参照が指示されている。

以下、順を追って細かく見ていく。

プロローグは「ブックレビューと経済学の冒険」と題され、「① 本書のねらい——経済学という学問の扉を開ける」と「② 本というのは面白い存在——本書の幾つかの工夫点」、そして2つの「補記」から構成される。

第1章は「市場と貨幣——経済学の大地にふれる」と題され、「二分法的な思考様式を超えて、〈市場〉と〈貨幣〉のあり方をどう理解すればよいか」との副題が目次のみ付けられている。①から⑩までの計10件（必ずしも10冊ではないことについては以下同様。詳しくは第Ⅲ節を参照）のブックレビューが収録されており、それに「間奏曲1——卒論と本とわたし」と塩沢由典・平井俊顕の寄稿文が続く。なお、①から⑩までの並び順は、著者名五十音順でも書名五十音順でも発行年順でも初出の書評順でもないが、第2章以下も同様である。

第2章は「資本主義と社会主義——対立する世界のゆく

え」と題され、「20世紀の資本主義と社会主義をめぐる〈知的格闘史〉を、今あらためて照らし出す」との副題が目次にのみ付けられている。①から⑳までの計20件のブックレビューが収録されており、それに「間奏曲2——書評と本とわたし」と瀧澤弘和・西部忠の寄稿文が続く。

第3章は「経済思想と経済学説——競合性と多様性のはざままで」と題され、「経済学という学問が真の危機に直面するなか、〈経済学史〉を学び直す意義とはなにか」との副題が目次にのみ付けられている。①から⑮までの計15件のブックレビューが収録されており、それに「間奏曲3——ゼミと本とわたし」と松原隆一郎・鍋島直樹の寄稿文が続く。

第4章は「人間社会と自伝・評伝——勉強と読書のきっかけを掴む」と題され、「ときには教科書から離れ、経済学者の肉声から〈人間社会〉の現状と未来を考え直す」との副題が目次にのみ付けられている。①から⑮までの計15件のブックレビューが収録されており、それに「間奏曲4——アニメーションの魅力と社会科学」と森岡真史・若森みどりの寄稿文が続く。

第5章は「経済学の冒険は延長戦へ——ブックガイド40のタイブレーク」と題され、「経済学の古典から現代の名著までカバーする、〈バリエーション〉に富む40冊ガイド」との副題が目次にのみ付けられている。なお、評者はスポーツには全く疎いところ、タイブレークと言えば高校野球で延長戦をなるべく早く終わらせるために導入が検討されているとのニュースをたまたま見聞きした程度であったが（本書評執筆にあたりネットで検索してみたところ、既に導入されているようである）、ここではテニスのタイブレークが想定されており、延長戦をむしろなるべく長引かせるためのもののようである¹。第5章は「タイブレーク（その1）——プラスアルファの推奨作20」と「タイブレーク（その2）——プラスアルファの推奨作20」に大別されるところ、「その1」は日本語文献、「その2」は「邦訳のある外国語文献」（343頁）のようである。それぞれ①から⑳までの計20件のブックガイドが収録されており、それに「間奏曲5——ドップのエアレーターとラヴォアのレ

ポート」と矢野修一・佐々木伯朗の寄稿文が続く。

補章は「時代を彩る書物たち——年末回顧号「経済学」（2016～2022）」と題され、「新自由主義と資本主義世界のゆくえ、これからの〈経済学の使命〉はどう展望できるか」との副題が目次にのみ付けられている。2016年から2022年までの計7本の『週刊読書人』掲載の「年末回顧号「経済学」」が収録されており、それに「間奏曲6——岩井克人先生の共著と寄稿」と猪木武徳・八木紀一郎の寄稿文が続く。なお、目次を見るだけでは分からないが、「間奏曲6」には、「本書『経済学の冒険』のブックレビューとガイドに所収できなかった岩井克人先生（著者の一人ないしは編著とする）の共著の書評、ならびに岩井先生がわたくしの本務校の愛知大学図書館報に寄稿していただいた文章」（454頁）が掲載されている。

特別編は「経済学はなにをどのように探究する学問か 著者の〈思考〉を追体験する知的冒険の世界」と題され、「特別編1 根井雅弘先生の『経済学とは何か』（中央公論新社、2008年）を評する」・「特別編2 森岡孝二先生の『雇用身分社会』（岩波新書、2015年）を読む」・「特別編3 伊藤誠先生との対談——資本主義はのりこえられるか」・「追悼＝伊藤誠先生を偲ぶ ライフワークとしてのマルクス経済学研究」・「特別編4 岩井克人先生のICU国際基督教大学最終講義——独自の理論を語り続けてきた半世紀——」の計5本の文章が収録されている²。

エピローグは「経済学の次なる冒険をめざして」と題され、「冒頭でぜひ明記しておきたいエピソード」（562頁）に続いて、「① 編集者との出会いとその後の継続的交流」・「② 本との出会いは人生に何をもたらすのか」・「③ 経済学の次なる冒険をめざして」、そして「謝辞」と「補記」から構成される。

年表は、「経済学史にかかわる書物・文献」が上段に、「世界史・主な経済史の出来事」が下段にそれぞれ配置され、簡にして要を得たものであるが、末尾に文責として「〔編集部〕」とあり、著者がどこまで関与したかは不明である³。

人物ガイドには77名の人物が登場し、人物ガイド作成

¹ 重箱の隅をつつくようで恐縮であるが、「テニスの四大大会GSの全豪、全仏、ウィンブルドンそして全米オープンのすべてで、ファイルセットへの「10ポイントタイブレーク」が試験的に導入されるのに絡めて（今後は順次この新ルールに移行していくようです）」（342頁）とあるのを読んでいったい何のことかさっぱり分からずネットで検索してみたところ、「ファイルセット」は「ファイナルセット」の誤植ではないかと思われる。

² 「追悼＝伊藤誠先生を偲ぶ ライフワークとしてのマルクス経済学研究」に番号が付けられていない理由は不明である。

³ 献本に同封されていたカバーレターに「株式会社読書人編集部 明石健五」とあることから、明石が作成したものと思われる。

文献一覧において出典が明記されている⁴。

初出一覧には、「ブックレビュー60冊とブックガイド40冊の計100冊」「年末回顧号」そして「間奏曲」のそれぞれについての「初出一覧」を以下に記載します。本書に所収された文章は、すべて初出の原稿に加筆と補整をおこなっています（「書き下ろし」と記載したなかで、わたくし自身のAmazonレビューを参照しているものがあることを断っておきます）」（639頁）とある。

本書は全体として縦書きであるが、書名索引と著者名索引は横書きであり、それぞれ見開き2頁で表示されている。また、「著者（編者）名・文献ともに、第1章～5章と特別編に取り上げられたものを挙げた」（ノンブルが付けられていないが、i（651）頁の次）とある。すなわち、補章と間奏曲6は索引の対象外である。また、書評の際に言及された本も対象外である。

以上が本書の構成であるが、さらに、吉川洋（東京大学名誉教授）・岩井克人（東京大学名誉教授）・水野和夫（法政大学教授）の3名による帯推薦文が寄せられていることも特筆されるべきであろう（肩書は帯による。ただし、原文では「（東京大学名誉教授）吉川洋」などと、肩書が先）。図書館に所蔵される際にカバーも含めてどこまで保存されるか定かでないが、『『経済学の冒険』へのリアクション』への12名による寄稿文と併せ、3名による帯推薦文も本書を構成すると言うべきであろう⁵。

なお、第1章から第4章までに収録されたブックレビューと人物ガイド作成文献一覧と初出一覧は2段組み、第5章に収録されたブックガイドと人物ガイドは3段組み、それら以外は原則として1段組みとなっている。また、レビュー＆ガイドの対象となった本には原則として表紙の写真が掲載されている。

Ⅲ. 本書の評価

それにしても書評集の書評はどのように行ったらよいのであろうか。個々の書評⁶について、書評の対象となった本と照らし合わせたり、初出の書評と本書収録の書評とを照らし合わせたりすることも考えられるが、「ブックレビュー＆ガイド100」を副題とする本書においてそれを行うのは評者の手に余る。

そこで本書評では、プロローグの「② 本というのは面白い存在——本書の幾つかの工夫点」において「本書を作りあげるにあたっての幾つかの工夫点についても簡潔に述べておきます。それらは本書を読みやすくするための工夫であり、ブックレビュー集をこえる特徴でもあると思っています。5つあります」（18頁）とあることを受けて、5つの工夫点に沿って本書の評価を試みることにする。なお、以下の見出しは本書による。

①計100冊の紹介（ブックレビュー60冊とブックガイド40冊）

本書に収録された最も古い書評は2001年5月発行の『経済学史学会年報』掲載の第2章②であり、次いで2008年12月25日発行の『Actio』⁷掲載の第4章⑨となっている。それから2009年3月10日発行の『Actio』掲載の第4章⑩、2009年4月号の『経済科学通信』掲載の特別編1、2009年6月13日発行の『図書新聞』掲載の第3章②、2009年6月26日発行の『週刊読書人』掲載の第3章①、と続く。これを受けて、例えば本書のエピローグにおいては、「一般紙にはじめて寄稿した2008年から本書が刊行される2023年で、15年以上になろうとしています。……本書はあえて大袈裟な言いかたをすれば、「15年分の重み」をもった作

⁴ ちなみに、Amazonレビューにおける著者のペンネームの手掛かりも明記されている。伊藤誠『資本論研究の世界』（新評論、1977年）について、「國學院大學の伊藤研究室の本棚に本書が「2冊」あるのを何気なく眺めていたところ、伊藤先生がそれに気づかれ、「塚本君、よければ1冊もっていきますか」といわれ」（534頁）、「すぐに一読して書いたブックレビューに、伊藤先生は笑顔でお礼を言われました」（同）とあるのは、同ペンネームによる「資本論研究の最良の入門書！」との標題の「2006年7月3日に日本でレビュー済み」のAmazonレビューと思われる。なお、著者は（成りすましてなければ）本名でもAmazonレビューを行っている。

⁵ なお、伊藤誠（東京大学名誉教授、日本学士院会員）も帯推薦の文章の執筆を快諾していたが、そのためのゲラが伊藤の自宅に到着した頃に著者は伊藤の訃報に接したとのことである（529-530頁）。

⁶ 第1章から第4章までの「ブックレビュー」と第5章の「ブックガイド」、そして特別編の「書評論文」等をここでは便宜的に「書評」と総称するが、このような概念区分は必ずしも本書全体を通じて貫かれているわけではなく、本書評においても同様である。

⁷ 本書には、紙名として「アクティオ・ネットワーク」とあるが（24頁、172頁、642-643頁等）、「アクティオ・ネットワーク」は組織名称または発行所名のはずである。気になって国立国会図書館で2008年から2009年にかけての現物を調べたが、「ブント・スピリッツを引き継ぎ社会運動のネットワークを！ 臨時総会においてアクティオ・ネットワークへの組織名称変更を決定」との記事が3面に掲載されているところの第1261号（2008年2月10日）の前の号までは題字の下に印刷されている組織名称が「ブント[Bund]」、発行所名が「せんき社」であり、同号からはいずれも「アクティオ・ネットワーク」に変更され、そして題字は少なくとも2008年から2009年にかけては一貫して「Actio」であった。

品だとわたくしは思っています」(564頁)とある。学術誌に掲載され、かつ、その後の旺盛な書評活動まで間が空いた2001年は言わば外れ値として、2008年が著者にとっての起点のようである⁸。

さて、本書はいったい何冊の本を書評しているのでしょうか。エピローグに「ブックレビュー60、ブックガイド40の計100冊(より正確にいえば、二冊を同時にまとめてレビューしているパートもあるので、実際には100冊を超えています)」(567頁)とあるが、第1章①・②、第2章③、第4章④はそれぞれ「二冊を同時にまとめてレビューしている」。ここまでで104冊である⁹。しかしこれだけではない。目次から直ちに分かることとして、特別編に2冊あり、書名索引と著者名索引の対象にもなっている。また、いささか分かりにくいものとして、問奏曲6に2冊ある。さらに分かりにくいものとして、補章の「[2022年・拡大版]資本主義と経済学の未来のために——「経済学的思考」批判の現代的意義」の註iiには、「少々長くなるが」(439頁)として、1冊についての書評の全文が掲載されている。よって、結局合計109冊となる¹⁰。さらに、独立した書評の対象に加え、補章の年末回顧号「経済学」や他の書評等において、数えきれない本の著者名・書名等が紹介されている。

では、これら109冊はどのようにして選ばれたのでしょうか。「本書で選書され、ブックレビュー(書評)された書物たちは、わたくし自身が「読み継がれてほしい」と深く願う書物たちにほかなりません」(17頁)とあり、世間で話題になっている本を満遍なく取り上げ、時には容赦な

く批判する、といった方針は取られていない。実際、本書の選書にはかなりの偏りが見られ、例えば過去の日経・経済図書文化賞受賞図書¹¹とは、管見の限り1冊たりとも重複しない。毎年年末の日本経済新聞に掲載される「エコノミストが選ぶ経済図書ベスト10」の2010年から2023年にかけて¹²とは、管見の限り6冊のみ重複する¹³。よって、「わが国の経済学徒が日本語で読める経済書の主なものが偏りなく選ばれており」(462頁)、「本書を通読することで、日本の経済学のフォーラムで何が分析され何が論じられて来たかを知ることができる」(462-463頁)との猪木の寄稿文は、リップサービスとして受け止められるべきであろう。ただし、選書に偏りがあることをもって本書の欠点と見なすべきではあるまい。それは個性として評価されるべきであろう。問題は、いかなる個性か、である。

それでは本書の選書の傾向を、まずは著者名から調べてみよう。上記の109冊について、3冊以上の著者名(共著者を含む)を冊数順(同一冊数では五十音順)に並べると、次のようになる。

- ・岩井克人 6冊
- ・根井雅弘 6冊
- ・丸山俊一 5冊
- ・伊藤 誠 4冊
- ・西部 忠 4冊
- ・宇沢弘文 3冊

これらのうち、丸山はNHKの「欲望の資本主義」シリーズの制作統括である。また、宇沢は3冊であるが、宇沢を扱った佐々木実の2冊を加えると、5冊とも数えられ

⁸ 著者には2001年以前に、2000年5月発行の『比較経済体制研究』掲載の書評もあるが、第5章(その2)⑦と同じ本を対象としたものである。なお、第5章(その2)⑦は書き下ろしとされているところ、ペンネームによる「社会主義と市場経済の理論的関係を再考するための古典的名著!」との標題の「2008年8月16日に日本でレビュー済み」のAmazonレビューとはほぼ同一である。

⁹ 本書に対する(成りすましてなければ)著者自身の本名による「経済学という学問の多様性を尊重するために——「書評集」の可能性から考える」との標題の「2023年10月20日に日本でレビュー済み」のAmazonレビューには、「ブックレビューは「63冊」のため、じつは合計「103冊」です。この「103」という数字は男子テニスのレジェンド、ロジャー・フェデラーのシングルス優勝回数。本書の構成は「テニス」をモチーフにしています」とある。おそらくは、第1章②の塩沢由典『複雑系経済学入門』とその文庫版の『増補 複雑系経済学入門』とを合計1冊と数えているものと思われ、実際、書名索引では『増補 複雑系経済学入門』は項目として挙げられていない一方、本文では『増補 複雑系経済学入門』の表紙写真のみが掲載されている。なお、第5章(その2)⑦は第2章②の書評対象である全9巻のシリーズの第6巻であり、二重計上と言えなくもないが、第2章②は洋書を対象としているところ第5章(その2)⑦は邦訳を対象としており、「邦訳の出来栄え」(367頁)にも言及されているので、別に数えられるべきであろう。

¹⁰ 脚注9で言及したように『複雑系経済学入門』と『増補 複雑系経済学入門』とを合計1冊と数えるとすれば、108冊となる。

¹¹ 第1回から第66回までの受賞作品については『日経・経済図書文化賞 受賞図書一覧 2023年11月3日更新』(https://www.jcer.or.jp/wp-content/uploads/2023/11/bunka_list_66.pdf)を参照。

¹² 「日経新聞 エコノミストが選ぶ経済図書ベスト10」(https://businessbooks.jp/ranking/2010/nikkei_20101225_01.html)を参照。

¹³ 神取道宏『ミクロ経済学の力』(2014年2位)、岩井克人(聞き手=前田裕之)『経済学の宇宙』(2015年1位)、ジャン・ティロール『良き社会のための経済学』(2018年1位)、スコット・ギャロウェイ『the four GAFA』(2008年7位)、佐々木実『資本主義と闘った男』(2019年6位)、及びブランコ・ミラノヴィッチ『資本主義だけ残った』(2021年6位)の6冊。

る¹⁴。

また、エピローグの「② 本との出会いは人生に何をもたらすのか」において、「とりわけ自分における思い出と知的影響が強かった3冊」(567頁)は西部忠『市場像の系譜学』、伊藤誠『市場経済と社会主義』、及び森岡孝二『強欲資本主義の時代とその終焉』であり、さらに「本当のことをいえば3冊でなく「4冊」(同)であるとして、岩井克人『経済学の宇宙』が付け加えられている。

以上を総合すると、著者の選書において偏愛されているのは、五十音順で伊藤誠、岩井克人、宇沢弘文、西部忠、根井雅弘、及び森岡孝二となる。伊藤は言わずと知れた宇野派のマルクス経済学者であり、岩井と宇沢は主流派の経済学者として出発しながら主流派批判に転じて独自の業績を上げ、西部は「主流派の経済学に代替しうる進化経済学(制度設計・政策論をふくむ)の構築に挑み続け」(30頁)、根井は経済学史家として主流派以外の経済学を学ぶことの重要性を訴え続け、森岡孝二は労働現場から資本主義の現状を鋭く告発した。

さらに、本書全体から直ちに印象として感じられることは、あるいは主流派経済学一辺倒を嘆き、あるいは資本主義の負の側面に注目し、あるいは新自由主義に警鐘を鳴らす、異端派経済学の比率の高さである。

その一方で、ミクロ経済学の教科書である神取道宏『ミクロ経済学の力』や異端派経済学の存在を無視した瀧澤弘和『現代経済学——ゲーム理論・行動経済学・制度論』などの主流派の本も取り上げられており、特に後者については「20世紀経済学の諸潮流を明快かつ系統的に概説した待望の作品である」(234頁)などと肯定的な評価も与えられている。ここには、主流派経済学の成果にも謙虚に学ぼうとする著者の公平な姿勢が表れていると言えよう。

ただし、新自由主義のイデオログとしてのフリードマンについては、全体を通して否定的な評価が前面に出ているように思われる。例えば『ショック・ドクトリン』についての「〈惨事便乗型資本主義〉を先導する中心的イデオログは、反ケインズ革命を強力に推進し続けたミルトン・フリードマン。民主主義でなく、独裁的軍事政権と表裏一体の関係にあった新自由主義経済政策の過激さと罪深さを深く実感できるだろう」(360頁)との評は、同書の著者であるナオミ・クラインの見解の単なる「紹介」に留

まらない著者自身の深い共感が込められているように思われる。また、書評ではないが「岩井克人先生のICU国際基督教大学最終講義「新しい会社の形を求めて なぜミルトン・フリードマンは会社についてすべて間違えていたのか」をめぐる特別寄稿」(536頁)における「岩井先生によるまさに白熱の最終講義は、惹きこまれる本当に素晴らしい内容に満ちていた」(538頁)との評は、単なるリップサービスを超えた心からの賛辞に思われる。

しかしながら、他方で著者は、根井雅弘『経済学とは何か』について、「多様な経済思想を学ぶことは自らの学問的立場を「相対化」し、「寛容の精神」を養うことにも寄与しうると本書では主張されている」(484頁)と指摘した上で、「本書のあらゆる章で行われている、フリードマンの経済哲学に対する著者の痛烈な批判的評価(むしろ「否定」・「否認」だろう)は本書の問題精神(=「寛容の精神」)と整合性を欠くのではないか」(同)と評してもいる。そして、ラニー・エーベンシュタイン『最強の経済学者 ミルトン・フリードマン』について、「「最強」でなく、むしろ「元凶」としてのフリードマン像が自然と浮かび上がるかもしれない」(311頁)としつつ、「しかしながら本書は、人間フリードマンの「多面的ドラマの軌跡と諸相」を克明に描き出した、優れた「評伝」に仕上がっている」(同)とも評している。こうしたフリードマンに対する宥和的な評価は、根井が整合性に欠けると著者が評価するところの「寛容の精神」に基づくものか、書評の執筆時期または発表媒体による一時的なものか、評者には素朴な疑問として残った。

②ブックレビューに登場する経済学者の人物ガイド

「第1章から第4章までのブックレビューをより読みやすくする工夫として、各レビューのなかで登場する人物(そのほとんどが経済学者)についての簡潔な「人物ガイド」を巻末「註」にて配することとしました」(20頁)とある。また、著者の父親に本書の第1章のゲラを読んでもらったところ、「各レビューで頻繁に登場する経済学者についての簡単な解説みたいなものがあるといいのではないかと助言があり、それが「人物ガイド」を加えることに繋がった」(583頁)ともある。

人物ガイドはまさに簡にして要を得たものであり、か

¹⁴ 重箱の隅をつつくようで恐縮であるが、宇沢の『人間の経済』を評するなかで、「ヨハネ・パウロ二世から依頼され、1991年の新しい「ノーレム・ノヴァルム」として提案したという「社会主義の弊害と資本主義の幻想(Abuses of Socialism and Illusions of Capitalism)」(269頁)とあるのを読んで、評者はっきり宇沢がヨハネ・パウロ二世から依頼されたのかと読み取ってしまい、詳細を知りたくてネットで検索してしまっただが、おそらくゴーストライターに依頼した上でヨハネ・パウロ二世の名前で発表された回廊の中の言葉に宇沢が注目したということのようである。また、「ノーレム」は「レールム」の誤植と思われる。「批判噴き出す「資本主義」は結局、何が問題なのか 財界トップも言及、再注目「宇沢弘文」の思想」(<https://toyokeizai.net/articles/-/479820>)を参照。

つ、「人物ガイド作成文献一覧」において出典も明記されており、学問的にも信頼のおけるものである¹⁵。評者自身、改めて教えられるところが非常に多かった。

しかしながら、ブックレビューでの登場順に註番号が振られてその順番に人物ガイドが配列されるというのは利便性の点で大いに問題がある。例えば1番にミーゼス、2番にハイエク、3番にランゲが登場するが、これは西部忠『市場像の系譜学』が最初にレビューされているからである。「各レビューで頻繁に登場する経済学者についての簡単な解説みたいなものがあるといいのではないか」ということであれば、著者名五十音順または生年順に配列した方がはるかに利便性が高まったのではないか。著者名五十音順であれば、本文を読みながら気になった人物についていつでもすぐにガイドにたどり着けたであろう。生年順であれば、人物ガイドを単独で最初から最後まで通読することにより、経済学史の概説の役割も果たせたであろう。評者としては、生年順に配列した上で人物ガイドの五十音順索引も別途設ければ、一番利便性が高まったのではないかとと思われる。

なお、人物ガイドで最も詳細なのは、本書をひもとくまで評者が全くその名を認識していなかったロジャー・フェデラーなる「元プロテニス選手」(632頁)であり、掉尾を飾っているが、これはブックレビューの掉尾を飾るのがジモン・グラフ『ロジャー・フェデラー』であることによる。「愛嬌」(77頁)のために利便性が犠牲にされたのだとしたら、本末転倒ではないか。

③経済学の「年末回顧号」と各章末尾の「間奏曲」

「補章として再録している「年末回顧号・経済学（週刊読書人）」は、その年に刊行された「経済学」についての書物があるテーマに集約してとりまとめた文章です。各章で扱うことができなかった本への言及もなされています」(20-21頁)とあるが、単独の書評で取り上げることが出来なかった本や、本書に収録することが出来なかった書評で取り上げていたかも知れない本についても、簡潔ながら取り上げられているのは情報量を高める点で有意義である。また、話題になったあの本についてどうして書評で取り上

げられていないのかと不審に思った本の多くがここで取り上げられているのを見出して、妙な話であるが安堵を覚えたものである。

ただし、「2022年・拡大版」については、大いに戸惑わされた。2016年から2021年にかけてはそれぞれ4～5頁であるのに対し、2022年は、おそらくは『週刊読書人』に掲載された際の本文23頁に加え、おそらくは本書への収録にあたって加筆されたであろう註が2段組みの小さな活字で16頁と、著しくバランスを欠いている。また本文も、2022年の回顧と言えるのは冒頭の7頁ほどで、残りは岩井に関する考察となっており、註の多くも岩井に関するものである¹⁶。これがなぜ2022年の「回顧」において語られなければならないのか、評者にはどうしても理解することが出来なかった。ただ、このテーマについて論じずにはいられないという著者の思いは伝わってきた。であれば、岩井論として別途論考が執筆されるべきではなかったか。

「間奏曲」については、収録されている文章そのものはいずれも興味深く、特に間奏曲1～3の「卒論と本とわたし」・「書評と本とわたし」・「ゼミと本とわたし」については書評集としての本書との関連性も密接である。しかしながら、補章と特別編を含めて全ての章の間に間奏曲を入れるという方針からか、間奏曲4は本書に収録する意義が薄いのに収録され、間奏曲5は数合わせのために書き下ろされたように感じられた。間奏曲6は、岩井が著者の一人である本2冊の書評と岩井の寄稿文の計3点から構成されるが、間奏曲1～4との繋がりで見れば、むしろ岩井の寄稿文のみ収録した方がすっきりしたであろう。2冊の書評は、第1章から第5章までのいずれかに配列されるべきではなかったか。

④ブックレビューした著者からのフィードバック

「さらに本書の大きな特徴・工夫点として、第1章から補章までの各章の最後に、本書でレビューした著者の皆さんからのフィードバックをともなう「寄稿文」（あえて本務校の教材ワードでいえば、「リアクションペーパー」でしようか）を掲載しています」(21頁)とあり、また、「寄稿していただいた文章を本書の巻末に一括掲載するのは

¹⁵ ただし、重箱の隅をつつくようで恐縮であるが、評者が専門とするミハウ・カレツキについて、「1929年にはワルシャワの「景気循環および物価研究所」に研究助手の職を得、33年にこの研究所から「景気循環論概説」をポーランド語で発表した」(626頁)とあるのは正確ではない。1933年に発表したのは「景気循環（理）論」であり、「景気循環（理）論概説」はその要約版として1962年にポーランド語で発表され、1966年に初めて英訳され、1971年の英語版論文集にも再録されたものである。1990年に英語版カレツキ全集第1巻が出版されて初めて「景気循環（理）論」そのもの（の英訳）が利用可能になるまで、英語圏の読者は1962年の「景気循環（理）論概説」を通じて間接的に1933年の「景気循環（理）論」の内容に接していたが、「景気循環（理）論」と「景気循環（理）論概説」とは区別されなければならない。ただし、上記の誤りは当該人物ガイドの出典となった伊藤誠（編）『経済学史』（有斐閣、1996年）に見られたものであり、本書は出典を忠実に「復刻」(635頁)したまでもと言えよう。

¹⁶ 既に述べたように、註iiにおいてある1冊についての書評の全文も掲載されているが、岩井の本ではない。

なく、各章の最後に配することで、読者はいわばリアルタイムの同時双方向的な進行のなかで、ブックレビューとブックレビューに対する著者のリアクションを味わうことができます」(22頁)ともある。これを読んで評者は、学術誌の書評欄において時として掲載される著者からの「リプライ」のようなものと想像した。

しかしながら、計12本の寄稿文のうち、本書に収録された書評に明示的に言及しているのは、管見の限り、平井・瀧澤・若森によるわずか3本である。また、第2章に寄稿文が配されている瀧澤の本は第3章において、第4章に寄稿文が配されている森岡真史と若森の本はいずれも第3章において、補章に寄稿文が配されている猪木と八木の本はそれぞれ第3章と第5章において、レビューまたはガイドされており、第5章に寄稿文が配されている矢野と佐々木伯朗に至ってはそもそも著者名索引にその名が見当たらない。

また、平井・瀧澤・若森による3本も含め、寄稿文の内容は本書(のデラ)全体を通読しておおむね好意的な感想であり、推薦文とも言うべきものである。帯推薦の文章及びリアクションの文章について、「依頼をした際、すべての先生が快諾してくださった」(582頁)とのことであるが、あるいは依頼の趣旨が正確に伝わっていなかったのかも知れない。

⑤書評論文、対談や最終講義をふくむ「特別編」

「特別編」には、第Ⅱ節でも紹介したように、計5本の文章が収録されている。そのことについて、「巻末の「特別編」も、本書に新鮮な活力を与えてくれているのではないのでしょうか」(22頁)とある。

評者が思ったのは、③の特に「問奏曲」も含め、著者が書評集として初の単著を出版するにあたり、書評のみならず、著者がこれまでに発表した学術論文以外の全ての文章をこの機会に収録しようとしたのではないかということである。

しかしながら、本書を丹念に読み込んでいくと、本書に収録しきれなかった書評やその他の文章の存在が、多くの場合出典とともに言及されていることに気付く(25頁, 73頁, 173頁, 182-183頁, 530頁, 534頁, 564頁, 574頁, 576-577頁等)。そこには、諸般の事情で収録こそできなかったものの、せめて存在だけは記録しておこうとの意思

が評者には感じられた。

Ⅳ. まとめに代えて

これまで述べてきたように、本書は書評集としては極めて複雑なキメラ的とも言うべき構成を持つ。キメラの構成の縮図とも言えるのが「2022年・拡大版」である。もっとはっきりとした構成も可能であったであろう。

しかしながら、著者はこのように本書を構成せざるを得なかったであろう。いや、本当はもっと多くの書評やその他の文章を収録したかったであろう。

そして、人物ガイドの並び順について利便性の観点から評者は注文を付けたが、著者はおそらく、本書をどこから読んでもよいカタログのようなものとして構成したかったのではなく、1つの作品として、最初のページから最後のページまで順を追って読んでもらいたいのであろう¹⁷。また、第Ⅱ節でも述べたように、各章における書評の並び順は著者名五十音順でも書名五十音順でも発行年順でも初出の書評順でもないところ、評者は必ずしも著者の意図を読み解けてはいないものの、並び順は著者の苦心の賜物と思われる。

プロローグには、「本書『経済学の冒険』は、経済学という学問分野をめぐる書籍へのブックレビューをつうじてのブックガイドではあるけれど、一冊をつうじて、一本の「経済学史」となるような本になることを強く願いながら編まれ、作りあげられた書物です」(12頁)とある。だが、第5章には著者が生まれる前に出版された言わば「古典」に属する本も取り上げられているものの、『国富論』や『資本論』や『一般理論』が取り上げられているわけではない。第3章と第5章には経済学史の通史が何冊か取り上げられているが、そうしたいくつかの本の書評を拾い読みすることで「一冊をつうじて、一本の「経済学史」となる」とも思えない。やはり、アリストテレスについての独自の評価を含む岩井「経済学史」の紹介とも言える「2022年・拡大版」も含め、本書全体を最初のページから最後のページまで通読してこそ「一冊をつうじて、一本の「経済学史」となる」というのが著者の意図であろう。

評者はこの書評のために本書を読了するのに2か月以上かかった(その間、必ずしも起きている時間は本書の読書に専念していたわけではなく、時には1週間以上本書を手

¹⁷「なお塩沢由典先生からのアドバイスを取り入れ、各レビューのあとに「関連レビュー」を付記しています。あくまでの目安になるものですが、当該レビューと関連し合う内容の書物のレビュー数本を案内する役目を担っています」(19-20頁)とあるが、当初の著者の構想に「関連レビュー」が存在しなかったことは、必ずしも塩沢のアドバイスによって「改善」されたところの「欠点」ではなく、最初のページから最後のページまで順を追って読んでもらうことが著者の本意であったものと解釈すべきと思われる。

に取ることのなかった時期もはさみながらではあったが)。まずは「プロローグ」と「エピローグ」、そして「間奏曲」の1から5までに先に目を通してしまったものの、改めて「プロローグ」から読み始めて、巻末の初出一覧と照らし合わせながら本文を読み進め¹⁸、人物名に註番号が登場するたびに巻末の当該人物ガイドに飛んだ。そして第4章の最後にロジャー・フェデラーの存在を知り、人物ガイドと併せ、最後の最後に著者はこれを持ってきたのかとある種の感慨に打たれた。補章の2016年から2021年までは一気に読めたが、「2022年・拡大版」には2日を要した。おそらく書評を依頼されなければ本書を最初から最後まで通読することはなかったであろうが、このような読まれ方こそ著者が望んだものであろう（なお、書評の執筆の前に改めて流し読みをするのは2日で済んだ）。

とは言え、カタログ的に本書を利用することももちろん可能であろう。収録された書評には、初出以降における続編や関連書籍等の出版情報も可能な限り加筆されるなど、個々の情報価値を高める工夫が凝らされている。

本書には、各章の冒頭文や間奏曲を中心に、立場や学派を超えた様々な人々との交流や著者の教育実践についても、可能な限り日付も添えて述べられている。そこには「記録すること」への強迫観念すら感じられ、評者は思わずたじろいだ。

それにしても著者の読書量には感嘆せざるを得ない。本書を通読しながら「これは私も手元に置いておかなければ」と思った本が何冊もあったが、念のため本棚を調べてみると既に所蔵していたこともしばしばであった。積ん読状態であったことすら忘れていたわけで、襟を正させられた。私にはいささか際物に思える本も含まれているが、読者諸氏は思わず実物を手に取りたくなる本を何冊も本書から見出すことであろう。

¹⁸ 重箱の隅をつつくようで恐縮であるが、2020年発行とある鍋島直樹『現代の経済学』の書評（226頁）の初出が「週刊読書人」2017年6月23日（642頁）というのはどういうことであろうか。